

尾形六郎兵衛の視点 (上)

漁業家で文化人

鶴岡市加茂の尾形六郎兵衛 漁業家であり文化人がいた。 いう歴史的背景も含め柏戸 こからやって来たのか?と (本名富樫剛)を考察した

たものだった。大相撲関係 文化懇話会会長として進め 作家・田沢稲舟の胸像が市 の掘り起こしを進め、女流 動した。後年は庄内の文化 どの北洋漁業で事業を率い、 既に48年。カムチャツカな 72歳で亡くなっているから が、この顕彰も尾形が鶴陵 内の内川端に飾られている 戦後は参院議員としても活 昭和48 (1973) 年、

庄内の「富樫」は一体ど された好角家であった。著 書房)は昭和36年に刊行さ と相撲と人生と~」(東都 れたが、こんな一節がある。 作「六十年目の自画像~旅 では相撲協会の「木戸御 免」。いわゆる顔パスが許

富樫は大曲から来た

の富樫家は七百年も連綿と えた家柄だという。秋田の と、富樫家はその昔、藤原 調べた富樫久吉氏(弁護十 前に山形県に分家を出した その大曲の富樫家が三百年 辞典に記載されており、こ して、子孫が現存している。 時代に加賀の国司として栄 ・鶴岡市出身)の話による 入曲に分家を出したことが 富樫の名字を姓名辞典で

> という。鶴岡付近にある宮 の姓の家系は加賀から出羽 とも言われているが、富樫 ろうか。弁慶安宅の関の富 樫姓は、その系統ではなか へと入ってきたらしい。 の秋田へ、そして庄内地方 樫左衛門は、架空の人物か そうではなくて、秋田に行 自らのルーツを考えた場合、 戻ったという説は意外性が 石川から新潟を通って、庄 った後、庄内に分家として 的に自然な流れだ。だが、 内に居ついたと思っている 人は多いに違いない。地理 庄内の「富樫姓」の人は

を調べた上での表現である 文脈から、自らも文献など ことが伝わってくる。 と書き進めている。 前後の 大仙市として広域合併され、 ある。歴史的なことには諸 説あるわけだが、今大曲は

旧神宮寺村には「富樫館」

昭和34年、柏戸の平幕時代、鶴岡の夏巡業を訪れ、 激励した尾形夫妻。左は富美夫人 日を眺めながら、毎日を送

形の顕彰文が刻まれている 内川端の田沢稲舟胸像。

という城が1300年代に 築かれていた。そして今も 富樫姓が多い。

豊かな田園に成長したため

て感謝している。そして91 して尾形は「女丈夫」とし

歳の長寿を全うするまで、 介護できたことをうれしく

か、柏戸はこせこせしない

ってきた。この山紫水明で

櫛引村は山紫水明

年である」。

つづっている箇所がある。

こうした母への思慕が櫛

詩情が込められた。櫛引

活達な性格を持っている青

尾形は立ち合いの出足の

ある。この環境で少年柏戸 り、見事なぶどうやりんご 野の櫛引村も、米はよく実 る。柏戸を生育した庄内平 臨む広漠の原野で、名馬が 海道の日高地方は太平洋に 生育し、調教されている北 る。「優駿サラブレッドが ッド」と呼ばれ始めた柏戸 良さから「角界のサラブレ は、東方月山、湯殿の連嶺 成長するに格好の自然であ に対して、さらに書き進め にさし昇る朝日を仰ぎ、西 が産出される豊かな農村で には金峯、母狩の山々に落

それが優勢で、父がこぼす 後、事業上の判断・解決に こともあった。母は父の死 も意見は口にして、時には 母への思慕は深く 夫唱婦随の時代であって



「六十年目の自画像」

母は父を助け、事業に協力 卒業後、すぐ家を継いだが、 目)である父を56歳でなく 地区の旧家・金内家出身だ し、在内中学(現鶴岡南高) った。先代六郎兵衛(六代 母・春恵は櫛引地域・丸岡 **賛歌**にも読める。 尾形の と長身に生まれ育った柏豆 となって、柏戸に対しての うだ。さらに尾形は1以8 引へのオマージュ(敬意) 期待にもつながっているよ のDNAにも踏み込むのだ (富樫 嘉美)

20歳で7代目襲名

大きな貢献をした。息子と 72歳で死去した。 った北洋漁業を戦後も維持 襲名した。父が先駆けとな は昌作の名前だったが、父 鶴岡市加茂生まれ。幼い頃 た・ろくろうべえ)明治34 した。昭和48年7月24日 て4年後、20歳で七代目を (本名安五郎)が亡くなっ (1901) 年3月29日 ◆尾形 六郎兵衛 (おが

毎週火曜日付に掲載